

ハンブルク・サブセンター整備報告

高 梨 友 宏

本報告書の課題は主として二つである。一つは、COE 都市文化研究センター・ハンブルクサブセンターの整備状況に関する報告、今ひとつは報告者自身の共同研究テーマに関する見通しの開陳である。しかし、これら二つの主要課題に加えて、第三に、赴任者の経験に基づく COE 共同研究のあり方への若干の提言と雑感を述べさせていだきたい。

報告者はハンブルク・サブセンター整備の任を帯びて、平成 14 年 12 月 26 日より平成 15 年 3 月 2 日まで、ハンブルクに滞在することとなった(本報告書は赴任先で執筆している)。クリスマス賑わいの名残をわずかにとどめる冬のハンブルクに到着したものの、クリスマス休暇中のため、ハンブルク大のスタッフとの連絡もままならず、電子メールの開通に手間取るなど予想外の問題に直面し、実質的に整備作業に入ったのは年が明けてからであった。もっとも、大晦日(ジルベスター)から新年に移行する午前零時の合図とともに町中で一斉に打ち上げられる花火の現場に居合わせられたのは不幸中の幸いとも言い得よう。肅然として除夜の鐘を聞きつつ迎える日本の新年とはおよそ異質のこの西洋の習慣は、文字通り打ち上げ花火のごとく景気よく新年を迎える活気と希望にあふれており、いささか暗然としていた報告者の気分を見事にうち砕いてくれたからである。

1 ハンブルク大学内 COE 都市文化研究センター・ハンブルクサブセンターの整備

サブセンターの整備について具体的な報告をするまえに、まず、ハンブルク大学日本学科について、および大学の地理的条件等について、簡単に触れておきたい。

大阪市とハンブルク市の姉妹都市提携事業の一環として、大阪市立大学はかねてよりハンブルク大学と大学間学術交流協定を結んでいる。大阪市立大学文学研究科は、このたびの COE プログラムを推進するにあたり、平成 14 年 11 月 28 日に西欧派遣団(阪口教授、金児教授、芝原教授、松村教授、金光講師および報告者)をもって、ハンブルク大学/東洋学部/アジア・アフリカ研究所/日本学科(Abteilung für Sprache und Kultur Japans in Asien-Afrika-Institut, Fachbereich Orientalistik)に同大学における共同研究拠点の窓口の役割を担っていただくよう正式に依頼した。

この機関は、現代日本の国家および政治を専攻する東洋学部長 マンフレート・ポール教授、日本文学および言語学を専攻する日本学科長・大阪市立大学名誉博士ローラント・シュナイダー教授を中心に、日本の近・現代社会史、近・現代文学、中・近世文学、近代詩を担当する 4 名の専任教授を擁し、さらに法律、芸術、経済、ジャーナリズム、文学史等の 6 名のスペシャリストを非常勤講師として招いている。また日本語を学ぶ人のコンピュータ指導を担当する非常

勤講師、および日本語講座を担当する2名の日本人講師がいる。

ハンブルク大学の日本学科の歴史は古く、1914年に創設された「ハンブルク大学植民地研究所」の日本学講座にそのルーツを持つ。ドイツではもっとも古い日本学研究の拠点である。大阪市立大学の他にも、日本の数多くの大学、研究機関とも密接なコンタクトを持ち、研究者間の相互招聘事業、学生間の交換留学事業を広く推進してきた。また学科の学術活動は三つの定期学術刊行物その他によって広く知られている。

このたびのCOE研究プロジェクトに当たって大阪市立大学文学研究科に設置された「都市文化研究センター」のハンブルク大学サブセンターは、シュナイダー教授、ポール教授および宮崎講師のご尽力により、同日本学科内（本館東隣の「東翼棟 Ostflügelbau」北側2階）の一室を貸与していただくという形で開設された。サブセンターの室名パネルには、シュナイダー教授、宮崎講師によって与えられた次のような独語訳称が掲げられている。

Städtische Universität Osaka
Forschungszentrum Stadtkultur
Projektstelle Universität Hamburg

さて同大学はハンブルクの中央駅からSバーン（鉄道）で一駅のダムトーア駅前に位置し、町の中心にも徒歩で15分程度である。大学周辺には、図書館、郵便局はもとより、書店、映画館、レストラン、スーパーマーケット等の店舗も豊富にある。内外二つのアルスター湖や自然公園も近く、作曲家ブラームスにゆかりの深いムジーク・ハレ（コンサートホール）や、C・D・フリードリヒの名画等のコレクションで知られるクンスト・ハレ（美術館）にもそれぞれ徒歩にして15分程度であろうか。まさに都市文化を享受する上で理想的な地理的環境にあると言えよう。また今後のCOE関係者の主要宿泊施設となるであろうゲストハウスも、大学から徒歩7分程度のところにある。ゲストハウスは各部屋にキッチン、冷蔵庫、電話、テレビ、トイレ、シャワーが備えられ、週に一度、ベッ

ドメイキングの掃除のサービスがある。宿泊費も一般のホテルに比べるとかなり手頃である。建物や室内は旧式の、したがってドイツ語でいわゆるgemütlichという形容が適当な、居心地のよい空間である。

次に、サブセンターの整備に関して具体的に触れたい。サブセンターに当たる研究室には、ハンブルク大学の他の研究スタッフと同様、あらかじめデスクトップパソコン（OSは独語Windows 2000）とレーザープリンタ、テーブル3台、書棚、洋服棚が備え付けられていた。日本学科のご配慮により、このパソコンに関しては、日本語OSのインストールも含めて自由な使用が許されていた。ただ、今後複数の研究スタッフが同時に在駐する可能性を考慮して、新たにデスクトップ・パソコン（独語Windows XPマシン）を一台購入した。両パソコンには、独語環境も残した上で、日本から持参した日本語Windows XPをインストールしたため、いわゆるデュアル・ブート方式になっている。ドイツ語を母語とするCOEスタッフが共同研究に参画した場合にも対応できるであろう（ただし独語環境のソフトの整備は今後の課題である）。またいずれのパソコンも学内LANに接続されており、インターネットのブラウジングおよび電子メールの送受信が可能である。基本的な事務用統合ソフト、辞書、百科事典の類もインストールした。また、リード/ライト式外付けCD-ROM機をそれぞれのパソコンに買い足したので、CDメディアへのデータ保存も可能である。

電話に関しては、元々敷設されていた内線電話を、先方のご高配により外線電話回線に切り替えていただいた。したがってドイツ国内の市外電話はもとより、国際電話も可能である。またカラー・プリンタ/カラー・ファックス/スキャナ/コピー（最大A4大）の統合機を購入の上、電話回線とパソコンに接続したため、研究室でのカラーによるデータのプリントアウト、スキャニング、ファックスの送受信も可能である。なお、国際電話の代金については、現在のところ、当局から請求があればその都度駐在員が立て替えて支払うという取り決めになっている（なお、機種の詳細についてはここでは

省略する)。

そのほか、壁掛け用ホワイトボード、ハンガー、電話番号帳、手紙用重量秤、筆記用具、糊、ハサミ等の基本的な文房具も揃えた。また観葉植物を2鉢購入した。

また、独和、和独、英和、仏和の各種辞典およびOCR等のソフト類の日本での購入と送付を依頼し、デジタルカメラの購入および搬送を2月末にハンブルクに到着予定のスタッフに依頼した。

研究室の利用は、基本的に月から金曜は9時から21時まで、土曜は正午まで(建物非施錠時間帯)であるが、延長利用も可能である(ただし入口施錠時は、一旦外出した場合、自動的に施錠されるため再入棟は不可)。コーヒー、紅茶などのセルフサービスの自由な利用も許されている。

なお、大学のアドレス、サブセンターの電話番号についてはCOEのHPを参照されたい。

2 報告者の共同研究に関する見通し

COE-Cチームに所属する報告者の個人研究テーマはさしあたり「都市生活における芸術の社会的機能に関する感性論的考察」と題しうるもので、おおよそ次のような見通しを立てている。

芸術は都市(ないし個別的な社会)の市民生活とどのような関わりを持つか。予想できるのは、芸術と都市の市民生活とは双方向的な相互限定の関係にあるということである。すなわち、芸術が都市の市民生活に何らかの影響を及ぼしてこれを形成するという側面と、共同体としての都市の市民生活のあり方が芸術経験や芸術創造に何らかの影響を及ぼしてこれを変容させていくという側面、これら二つの側面が両者の関係のうちに認められるだろう。こうした双方向的な関係性は、芸術や都市生活の本質論的考察に引き渡し得るのみならず、それぞれを時系列的な変化相のもとに捉えるときに初めて明瞭となるべきものであろう。

芸術が都市の市民生活に与える影響ないし作用としては、二つのことが挙げられる。すなわ

ち、教養形成に与って精神的向上を促すこと、および、それとは逆に、娯楽や気晴らしの手段となって、ストレスの多い市民生活を耐えうるものにするこの二点である。芸術が持つこうした互いに相容れない作用は、芸術の本質規定からすれば、その歴史の変遷の過程に位置づけられるが、社会構造の点からみれば、市民社会におけるエリートと大衆への二極化の事実がこれに対応するといえよう。もっともこうした作用の観点から「芸術」をとらえる場合、「芸術」概念の規定それ自体が問題となるであろう。この問題についても併せて考えたい。

また、共同体としての都市が芸術に与える影響としては、メディアや批評的言説や政治的政策などに浸潤された美的意識ないし趣味、モードが、芸術経験や芸術制作に規定的に及ぼす変化が挙げられよう。こうした変化の背後には、共同体の「生活世界」を構成する基盤の一つと考えられる「共通感覚」が伏在していると考えられる。そして都市の共同体の感性的基盤としての共通感覚は超越論的地平に属する問題である。

こうした問題意識をもって、芸術と都市生活との相関関係を、感性的価値体験としての芸術経験の事実性および、その可能性の条件としての超越論的地平に関する考察という形でとらえ直して研究を遂行したいと考えている。それゆえこの問題は、主として現象学の立場に拠りつつも、社会哲学、コミュニケーション理論などを援用して行うことになるであろう。

なお、抽象に偏しがちな理論的解明を、できる限り具体的な芸術実践の実例に則して考察することに務めたい。そのため、フィールドワーク(芸術実践への参加を含む取材、芸術家へのインタビューなど)を取り入れた研究にしたい。

さらに、共同研究の可能性を考慮して、共同研究者間の研究成果を積極的に取り込こむところの、いわば「対話的考察」の実践を実現するよう努力したい。

3 報告者の経験に基づく共同研究への一般的な提言または雑感

さて、最後に、報告者のハンブルク出張における個人的経験への反省から、今後の共同研究のあり方に対する二、三の提言ないし雑感を述べることをお許しいただきたい。

今回の出張で本部から報告者にあらかじめ課せられた主たる任務は「サブセンターの整備」であったが、実際にハンブルクに駐在して、先方からの予想外の要望にも臨機応変に対処する必要がしばしば生じることを経験した。こうした事態が出来ることは共同研究の性格上、考えてみれば当然のことであって、当初の報告者の自覚が不足していたと言えればそれまでではある。先方からは、サブセンターの駐在員は本部からの派遣員として、本部との媒介役、本部の窓口であるとともに、一個の自律的な研究者としても見なされている。こうした先方の理解に基づいて要望されうる事態に対処すべくあらかじめ心構えをしておくことは、今後の駐在員一般に求められる事柄と言えよう。一例を挙げれば、報告者の場合、研究内容に関する自己紹介および共同研究の可能性についての見解を先方のスタッフを前にしてドイツ語で開陳することが求められた（ただし実際には先方との予定が合わず、流れてしまった）。もとよりこうした要望を最優先にすれば、駐在員の範囲がきわめて限定される虞れ無しとしないが、日常生活のレベルでも先方のスタッフと積極的に意志疎通を図ることが共同研究の前提として当然要求されることを考慮するなら、期待される結果はともかくとしてドイツ語での意志疎通の努力を少なくとも見せることが先方との相互信頼関係を築く上で重要な要因になることは言をまたないであろう。

また、逆に、駐在員が本部に対して些細な事柄について問い合わせをしても、必ずしも明快

な即答がなされるとは限らないという事実は、駐在員には先方からばかりでなく本部からもある程度自律的な判断力を持つことが要求されているということを端的に示している。もとより公的使命を帯びて派遣されている以上、駐在員の「自律的判断」が独善的なものに偏ってはならないことは言うまでもない。したがって先方および本部との意志疎通を十分図りながらも、なお自律的判断力を持った一個の研究者としてふるまうこと（抽象的な言い方になるのが遺憾である）が駐在員には求められると考える。

次に、共同研究に関する交渉に際し、一般的思考様式の点での日独間の差異について、少なくとも自覚的であるべきことを実感した。それはドイツ人との個人的なつきあいの場面にも幾分当てはまることではあるが、公的な交渉の場合にはこの差異がより先鋭化することになる。将来のプランを早くから明確に立て、曖昧なヴィジョンでは納得しないドイツ的思考様式と、相手の意向を忖度せんとして自らの要望をあからさまに示すことを嫌う日本の流儀とが無自覚のまま直接に出会った場合、双方の間に誤解が発生する可能性がある。先方に対して迎合的に歩み寄る必要があるというわけではないが、少なくとも日本側の我々としては、先方に求めることをあらかじめ一義的な決定にもたらした上で、交渉に臨むことが必要であった。共同研究が始まって間もない今回のケースは例外とも言えようが、今後ともこの差異に自覚的であることによって、そうでなければ起こり得べき誤解を十分避けられうるのではないかと考える。

僭越ながら上記二点を今後の共同研究のあり方への雑感的提言として記させていただいた。

以上をもって、ハンブルク・サブセンターの整備状況等についての報告に代えさせていただきたい。